

平成27年度「島嶼学概論Ⅰ」硫黄島研修レポート

考察と提案

鹿児島大学人文社会科学部人間環境文化論専攻
博士前期課程1年 松永千紗

1. 硫黄島研修概要

フェリーみしまが硫黄島の小さな港に入港した時に見た景色は今までに行ったどの島とも全く違う趣きのあるものだった。島の名前にもなっている硫黄が採掘されていた活火山「硫黄岳」は残念ながら霧に隠されてしまっていたが、右手になだらかなお椀型の山「稲村岳」、その先には安山岩と玄武岩で形成されている「矢筈岳」、左手には赤い橋の掛かった高い崖が見える。しかし、そのような風景よりもなによりも、海面の模様に衝撃を受けた。フェリーが進むごとに乱される橙色の波は、海底から噴出する火山性の噴出物と海水が化学反応を起こして染まったものである。青とオレンジのコントラストは、晴れた日には劣るものの、目に焼き付くようだった。

港が近づくとつれ、大雨にも負けない高らかな太鼓の音が聞こえてきた。ジャンベは硫黄島を語る上で外せない要素で、私たちが今回お世話になったのも「みしまジャンベスクール」の施設である。ジャンベの神様と呼ばれているギニアのママディ・ケイタも訪れており、島の子どもたちが練習している他、ジャンベ留学生として若者を半年ごとに受け入れている。

また、島外からやってきて住んでいるのは若者だけではない。矢筈岳の裾野にある学校は、小学校と中学校を併設しており、更に複式学級を取り入れている。地元の子どもの他に、鹿児島県から派遣されている先生とその子ども、更に潮風留学生として外部の子どもを受け入れて、やっと成り立っているのだそうだ。

島は上から見るとひょうたん型に近い形をしている。お尻の丸い部分に硫黄岳があり、口の部分に飛行場と牧草地の平らな部分がある。今回は島にある二つの温泉を訪れた。右のくびれにある坂本温泉と左のくびれにある東温泉である。双方とも整備をしてあるが、特に東温泉は加えて景観を崩さないような配慮がコンクリートの色などに見え、明るい海の色や濃いオレンジの岩肌などがとてもきれいだった。

他にも俊寛像や島の中心となっているセンター内とジオパーク推進のために作られた展示室の見学、見晴らしの良い展望所から島の全景を見渡すなど、島全体をある程度回ることができた一泊二日であった。

2. 他島の事例と考察

今回案内をしてくださった大岩根さんは非常に博識で、実際に断層などを見ながら聞い

た地学のお話は、とても分かり易く、文系理系関係なく感心させられた。大岩根さんが携わっているのは三島のジオパーク計画とそれに関連する地域活性化事業であるという。そこで今回のレポートでは、今回の研修で感じたことと特に島活性化に関しての自分の考えを、事例を挙げながら述べた上で、稚拙ながら現状から島おこしをするならば提案できることをまとめてみたい。今回の研修プログラム内では非常に限られた方からしかお話を聞いていないため、一面的な見方であることをご容赦頂きたい。

プログラム内でお話をしていただいたのは、大岩根さんはじめ「村役場」の方、また島に来て数年目になられる学校の先生、ジャンベスクールの方々、看護師の方である。特に村役場の方、ひいては鹿児島県などの「行政」機関は、移住促進と地域おこし、島おこしに注力している。しかしながら、農畜産業をする若者を移住定住させることだけが「島おこし」だろうか。また「島おこし」に最も重要で、かつ事業の意志決定をする上で最も尊重されるべきは、今回ほとんどお話しすることができなかった、「島民」の意思ではないのだろうか。

ジオパーク事業含め、今回聞いたお話は、分類するといわゆる「トップダウン式」の地域おこし事業となる。地方創成が唱えられる以前から日本各地で様々な地域活性化事業が行われてきたが、継続され、地元が「豊か」になり、大団円と相成った例の中で、「トップダウン式」であった場所は果たして多くあるのだろうか。

島の活性化事業のいわゆる「成功例」としてしばしば取り上げられるのが、香川県にある直島である。瀬戸内海に浮かぶ人口約3千人、約8平方キロメートル¹の島で、産業は観光業の他、養殖などが盛んであり、大正6年からは三菱マテリアルの工場が中心となっていたが、平成元年から現在に至るまでは、ベネッセコーポレーションによる「現代文化村構想」の推進によって延べ40万人²もの観光客が訪れるようになった。直島にある現代アートの美術館また民家を利用した展示などは最先端かつ質の高い非常に素晴らしいものである。かくいう私も観光客として島を訪れたが、民宿のおじさんと話をしている中で気になる発言がいくつかあった。その一つが、「(観光客の³) 遊び場になってしまった」という言葉である。また島の住民を積極的に採用しているというベネッセ施設での対応、集落内で会った住民たちからの視線に加え、世界各国からやってくる若者を主とした観光客の存在とその行動などを考慮すると、40万人観光客がやってくる島が「豊か」と言い切ることができない。

直島を主導しているのはベネッセコーポレーションつまり企業であるが、これもまた一種の「トップダウン式」と言えるだろう。そもそも、「島民」が「豊か」に暮らすた

¹ 直島町 Web ページより (<http://www.town.naoshima.lg.jp/>) 【最終閲覧：2015/7/15】

² 直島町観光協会インタビュー記事より (<http://www.milt.go.jp/common/000213061/>)

³ 筆者補足。

めの「地域活性化・島おこし・地域おこし」であるのに、「島外者」である観光客が「豊か」な観光をすることができても、「島民」が「遊び場になってしまった」と感じてしまうほど当事者から乖離してしまっているならば本末転倒である。

このような事例は、観光客の多い硫黄島の隣の島、屋久島をはじめ、各所で見るができる。硫黄島と直島や屋久島などは人口規模や面積などを始め大きく違っているが、反面教師にすることは可能である。

しかしながら、これは「行政」ないし「企業」を全面的に排除し、更に「島外者」をも入れずに、「島民」だけで「島おこし」を進めるべきであるということではない。三者の十分な意思疎通と協力関係が不可欠であるということなのである。

ここで事例として挙げられるのは、下甕島の古道再生プロジェクト⁴である。鹿児島県北西部にある甕島列島の最南端の下甕島は、人口約 2700 人、面積約 66 平方キロメートルであるが、プロジェクトの中心となった二集落は合わせても 400 人ほどである。プロジェクトは下甕島の青瀬・瀬々野浦間を繋ぐ旧生活道を、トレッキングコースとして再生しようというもので、元々は両集落の区長はじめ有志が始めたものに地域おこし協力隊の派遣員と学生十数名が加わって進行した。私も学生チームとして約一年間をかけて参加したが、第一のゴールに設定されていた島内外から参加者を募ってのお披露目に総勢 145 名が参加したこと、それまで合同行事を行ったことが無かった二集落間の交流が活性化したこと、学生も加えた地域内の連帯感が増したことなどを踏まえると、成功した事例ということができる。プロジェクトの成功要因は、地域おこし協力隊という半「行政」側の派遣員・集落に住む「島民」・学生などの「島外者」の三者が一丸となって、それぞれの良い点を持ち寄ったことであると言える。

3. 硫黄島に対しての提案

では、以上の事例と考察を踏まえ、硫黄島に対してどのようなことを提案できるだろうか。

第一に、「島民」の意思を収集することが必要である。そもそも島を活性化させたいと思っているのか、どの方面の活性化を望むのか、外から移住者が必要だと感じているのか、日常のどのような点に不安があり、どうすれば解決すると思うのか、などの基本的な質問で意思を集めるのに加えて、個人的には島民がこれまで島とどのように付き合い生きてきたのか、昔話や伝説、原風景などの調査も同時に行うことも提案したい。前者はその後島おこしを企画する上で重要な資料となるはずである。後者は観光客や移住者などの「島外者」へ硫黄島を説明する際にとっても重要な情報となるのではないかと考えている。これまで生きてきた島民の軌跡の中には、これから生きていく島民が知る必要のあること、知

⁴ プロジェクトについては Web ページ (<http://suke8.jimdo.com/>) また Facebook ページに詳しい。【最終閲覧：2015/07/17】

りたいこと、大事にしていかなければならないことが詰まっていると思う。

第二に、「島外者」の視点と「島民」の視点の両方を取り入れるよう留意することである。「島民」にとって当たり前であることが「島外者」にとって当たり前ではない、特別で価値のあるものだという場合は往々にしてあることだ。そんな時に「島外者」の目で、島の特別なところを見つけると、島をアピールするひとつのポイントになり得る。また「行政」やある世代の意見としてありがたいが、いわゆる箱モノを建てるだけで人が来るという考えは今や通用しない。「島外者」の若者、つまり今後島を訪れる可能性のある人々の意見もまた、「島民」の意思の次に重要なのである。

第三に、三者それぞれの立場に立てる人物の重要性を認識することである。島民から何かを始めることが一番良いと私は考えるが、もしそれが無い場合は、住民の意思を集めた後、その中から、「島民」と共に何をやりたいのか、何ができるのかを考える必要がある。それをマネジメントするのに最も適しているのは、半「行政」の立場である人物、つまり下甑のプロジェクトでいう地域おこし協力隊の派遣員、硫黄島でいう大岩根さんのような人物であると思う。元「島外者」で外から来る人の気持ちが分かる。「行政」としての参加なので、支援が必要な場合は双方の状況が分かる。島とよく接し、「島民」とよく触れ合っているので、彼らの気持ちも分かる。そんな人物はそうそう居ない上に三者間で板挟みになりかねないが、役割を複数人で分担し、グループで行うなどいくつか方法が考えられるので、頑張ってもらいたいと思う。

4. おわりに

以上、まず他島の島おこしの事例を挙げながら、「島民」「行政」「島外者」の三者間協力の重要性を述べた後、硫黄島の島おこしを、良い方向でこれから盛り上げていくために何が提案できるのか三つの点を挙げた。一つ目は最も尊重すべき「島民」の意思収集を行うこと。二つ目は「島外者」の視点もまた参照する必要があること。そして最後に三者の間に立つことができる人物の重要性について述べている。具体的な事業の提案は、ほかの参加者が更に専門的な知識を持って行っていると思い、やや抽象的な内容に留まってしまったのが心残りではあるが、私ならこうする、という理想を提案させて頂いた。

研修二日目の朝、参加者の一人と一緒に二時間ほど集落部分を歩き回った。やはり橙色の波が印象的な港から、漁船を眺め、赤土の浜へ出、神社を回り、商店のある通りに差し掛かった時、出会った島民のおじいさんと話をした。元気で長生きの源である新鮮な魚の話や鍵をかける必要がないほどお互いの顔を知っている安心感のある穏やかな生活模様を聞いて、おじいさんたちが最後までそのように暮らし続けられれば良いなと思った。しかしながら、このまま人口減少が続き、人よりクジャクの方が多く闊歩し始める頃、島は集落としての機能を失ってしまうだろう。せめて「島民」のみなさんが楽しかったなあと思いつつ、最後の船に乗れるような島になってほしいと思う。

5. 謝辞

今回の研修をサポート頂いた大岩根さんはじめ三島村役場のみなさんとジャンベスクールのみなさん、本当にありがとうございました。硫黄島のような、火山の呼吸が目に見える島を訪れることができたことを嬉しく思います。今度は晴れた日に、あの絶景をもう一度見に行きたいです。